

やま の うえ とおり やま
山ノ上通山遺跡群

発掘調査概要報告書



1993

郡家町教育委員会

山ノ上通山遺跡群

発掘調査概要報告書

1993

郡家町教育委員会

例　　言

1. 本書は、郡家町教育委員会が実施した、郡家町山ノ上地区工業団地開発事業に伴う山ノ上通山遺跡群の発掘調査概要報告書である。
2. 調査を実施した遺跡は、郡家町山ノ上字通山ほかに所在する。
3. 本書では、遺構の略記号として、S A：柵列状遺構、S B：掘立柱建物跡、S D：溝状遺構・古墳周溝、S I：竪穴住居跡、S K：土坑状ピットを用いた。なお、今回示した遺構名は仮称である。
4. 本書に使用した方位は、遺跡分布図を除いて全て磁北である。
5. 平成3年度、4年度の調査成果については、将来的に詳報を刊行する予定である。
6. 発掘調査によって得られた記録類および出土した遺物は、郡家町教育委員会に保管されている。
7. 本書は、上田昌彦の協力を得て、中野知照が執筆・編集を行った。

は じ め に

山ノ上通山遺跡は、郡家町の北側を西流する私都川流域右岸の山ノ上地区に所在する。遺跡は、同地区付近を通る県道国府・麻生線を境に西側の丘陵に立地している。西側の丘陵は、平成3年度の分布踏査と試掘調査により、丘陵上においては18基の古墳、丘陵裾部で掘立柱建物跡が確認された。また、西隣りの上峰寺・下峰寺地区ではそれぞれ3基・23基の古墳の存在が知られている。遺跡の北側に隣接する国府町岡益地区においては、最近の調査で変形八角形墳であることが確認された彩色壁画で知られる梶山古墳が所在する。梶山古墳の周辺では、岡益石堂、岡益廃寺や多くの古墳が密集していることは衆知の如くである。

今回の発掘調査は、工業団地開発事業に伴うもので、平成3年度に行われた試掘調査の結果をもとに、平成3年度に山ノ上27号墳、平成4年度は丘陵裾部2500m²が対象となった。

調査の結果、古墳時代前期から奈良・平安時代にかけての14棟余りの建物跡、多数の土坑や柱穴状ピットが検出され、ほぼ継続的に建物が造営された地域であることが確認された。また、製鉄との関連が考えられる窯状遺構も検出されており、古代の私都川流域を考える上で、多くの成果を得ることができた。



上空からみた山ノ上通山遺跡（ラジコンヘリによる撮影、東より）

位 置 と 環 境

山ノ上通山遺跡は、私都川によって形成された沖積平地の中流域右岸に展開する丘陵の南東側山裾に位置する。遺跡の北側には、扇ノ山より派生した丘陵が国府町から鳥取市南東部へとつづき町界をなす。遺跡は、これらの丘陵よりさらに分岐し南にのびる丘陵上、および山裾部に所在している。遺跡の東側には、県道国府・麻生線が通っている。

私都川周辺は、水田として利用される農村地帯であるが、近年の各種開発工事によって大きく変貌しつつある。また、これらに伴う事前調査によって貴重な遺跡が発見され、八頭郡内でも遺跡の密度の高い地域となっている。

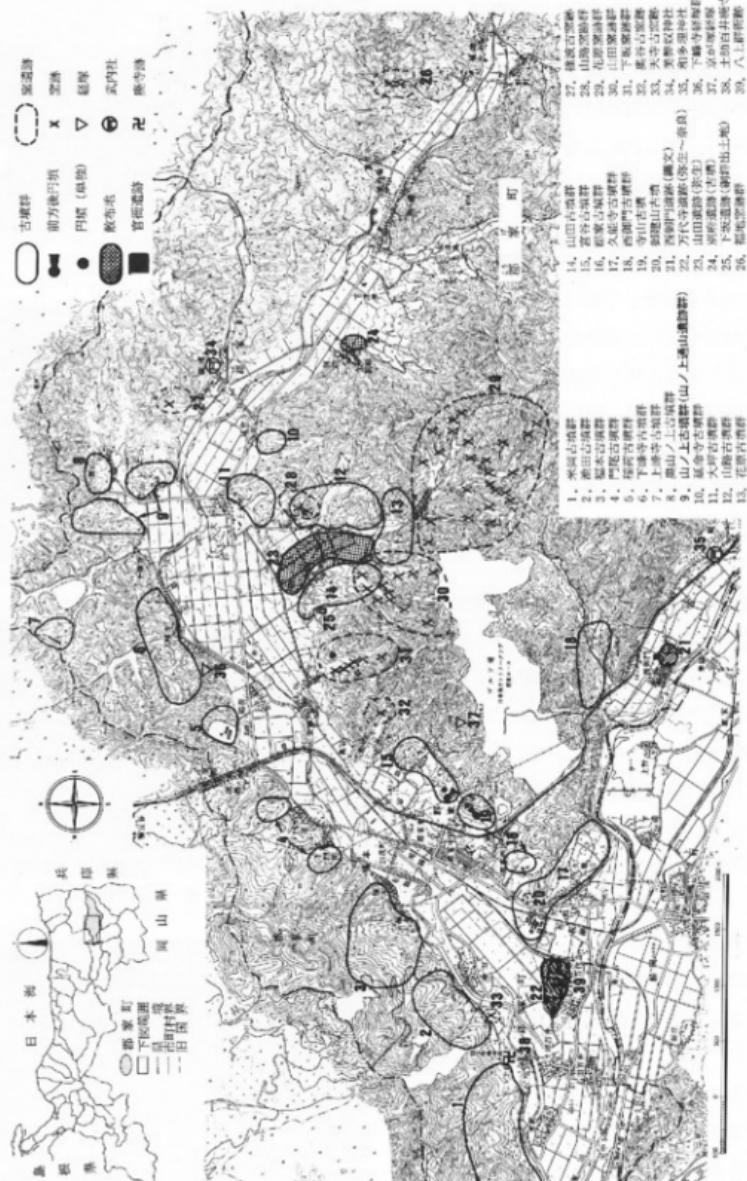
私都川中流域においてもっとも古い時期の遺跡としては、本遺跡から南東へ約2km離れた弥生時代中期の下坂遺跡があり、六区割製縦襷文銅鐸を出土している。弥生時代後期では、下坂遺跡の西方0.6kmの丘陵突端部に木棺墓群が営まれた下坂墳丘墓がみられ、後期後半であることが知られている。このほぼ同時期には、山田遺跡でも遺物の散布が知られ、古墳時代までつづく集落跡の存在が想定される。古墳時代に入ると、私都川を望む丘陵上に大小様々な古墳が造営され、山ノ上通山遺跡にも18基が確認されている。集落遺跡は現在のところ確認されていないが、小規模な建物跡が本遺跡で検出されたことにどまっている。歴史時代に入ると、私都川左岸の丘陵斜面に窯跡が営まれ私都古窯跡群をなす。本遺跡は、これとほぼ同時期の掘立柱建物群が確認されている。

調 査 の 概 要

発掘調査は、山ノ上27号墳については平成3年11月1日から同年12月26日まで現地調査を行い、平成4年3月末日まで整理作業を実施した。山ノ上通山遺跡は、平成4年4月から調査を実施した。平成3年度に行った試掘調査の結果をもとに、J地区・K地区を対象とし、遺物を全く含まない表土下約15~60cmまでを重機によって掘り下げ、以下は全て人力によって掘り進めた。調査地区には、いずれも10m×10mの方眼を組み、調査地の東西軸をそれぞれA~C区・A~E区、南北軸をI~III区・I~VII区に区分した。

調査の結果、J地区においては掘立柱建物跡11棟、柵列2基、溝状遺構9、窯状遺構1基が確認された。検出された遺構は、全て同一の方向性をもっており規画性がうかがわれるが、数度の建て替えが行われている。K地区では、後世の削平が行われているため判然としないが、掘立柱建物跡2棟、竪穴住居跡1棟、柵列4基、土坑5基、溝状遺構4、窯状遺構2基が確認された。検出された遺構は、古墳時代前期から奈良・平安時代の遺物を出土しているが、全て同一検出面での確認であり今後詳細な検討を加えてゆく予定である。

都家町内遺跡分布図



調査の成果

山ノ上27号墳（平成3年度実施）

本墳は、郡家町界に所在する北側の丘陵より南へ分岐し派生した小丘陵から、さらに東へのびた尾根の先端部に位置し、標高116m～119mに立地する。

本墳は、標高約119m付近で尾根の稜線に直交した溝を掘削して墳丘を築造していた。溝は馬蹄形をなし、墳丘のはば全周を巡っていたと思われる。墳丘の北側は、西側の掘割り状の周溝に連続した浅い溝状の段が設けられており、墳丘基底部をなしていたと考えられる。墳丘には若干の盛土が認められるが、そのほとんどは地山の削り出しによって整形されていたものと思われる。

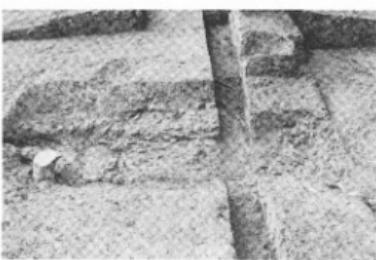
埋葬施設は、墳丘中央部とやや東に偏した位置に2基造られていた。墳丘中央部に位置する第一主体部は、地山を掘り込んだ隅丸長方形の掘り方を設け、さらにその中央に木棺を埋置する墓壙を作っている。墓壙床面の一部には棺材を安定させるための溝が残っていた。また、第二主体部も第一主体部と同様の墓壙が作られていた。墓壙床面の北側小口側には「U」字状の溝が設けられており、小口板をはめ込んでいたと考えられる。第一・二主体部とも尾根軸線に直交して造営されていた。また、第一主体部の西側に小土坑が掘り込まれており、土坑内に土師器壺が供獻されていた。壺の特徴からみて、布留併行時期よりやや後出する段階のもので、おおむね古墳時代中期前半～中頃のものと思われる。



山ノ上27号墳、調査後遠景



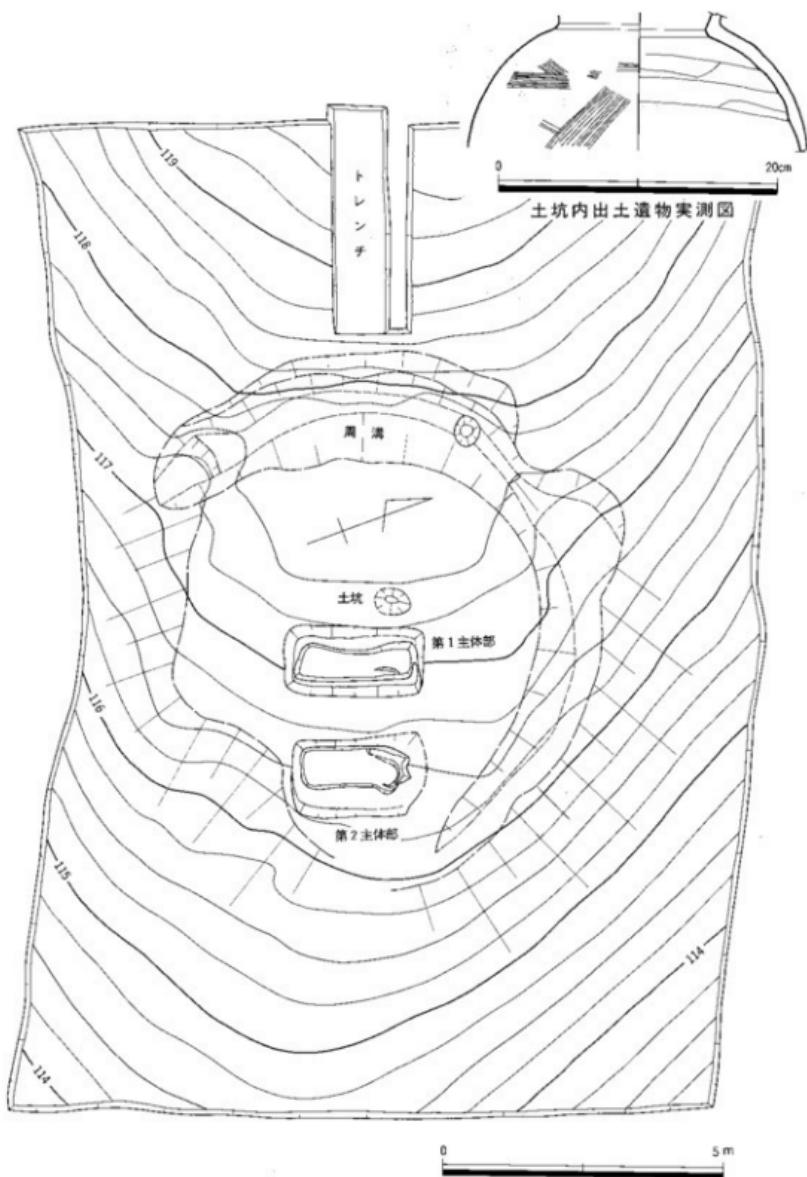
山ノ上27号墳、調査後全景



山ノ上27号墳、第一主体部検出状態



山ノ上27号墳、第二主体部検出状態



山ノ上 27号 墳 遺構図

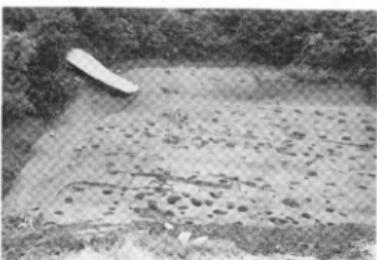
山ノ上通山遺跡、J地区の調査

調査の結果、掘立柱建物跡11棟、柵列5基、溝状遺構9基、窓状遺構1基、焼土坑および多数の柱穴状ピットを検出した。掘立柱建物跡および柵列・溝状遺構は、調査区中央部の斜面と東側の斜面下位に集中してみられ、これに伴って多数の柱穴状ピットが併存する。溝状遺構は、掘立柱建物跡と併行関係にあると考えられ多条の存在が確認された。中央部にみられる溝状遺構には、地山を混入させた盛土・整地層で被覆され、その後更に掘立柱建物が作られていた。数条の溝状遺構の埋土は、その堆積状況に先後関係が認められないため、それぞれ余り時を隔てることなく作られていたものと思われる。

J地区で検出された遺構は、その主軸方位をN=17.5°～23°Wの範囲に収まるよう作られていることが確認された。また、調査区東側には、焼土・炭片を含んだ黒褐色土（粉炭）の広がりが認められ、これに先行する溝状遺構の存在も知られた。黒褐色土中より須恵器高杯・杯身等が出土し、おおむね陶色編年第II型式第4段階の特徴を有している。調査区の南西側では、全長約4mを測る窓状遺構が検出された。窓状遺構は、横口を持たない型式のもので所謂「炭窓」と呼ばれるものである。この窓状遺構は、熱残留磁気測定によりA.D 640年±15年の測定結果が得られた。調査区中央部の盛土中および、盛土に先行する柱穴状ピットの一部から陶色編年第IV型式第一段階に相当する須恵器壺の出土をみた。これらのことにより、J地区にみられる各遺構は、古墳時代後期後半より奈良時代にかけて連続と



J地区、遺構検出状態（空中写真）



J地区、遺構検出状態（北東より）



J地区、遺構検出状態（北東より）



J地区、柵列検出状態（南東より）

して営まれていたことが判明した。各遺構についての詳細は、後日報告することとして、ここでは大まかに遺構の推移を以下に述べておく。

第一段階に、調査区東側において掘立柱建跡SB-10、SD-11が作られ、焼土坑がつづく。その後、窯状遺構が作られ、調査区中央部の柵列・溝状遺構を経て、奈良時代に入ると調査区の西側の各遺構へとつづくものと考えられる。



山ノ上通山遺跡、J地区遺構配図

J地区遺構一覧表、柵列

遺構名	規 模	全 長	主軸方位	方 向
S A-01	8 間	17.2m	N-23°-W	南北方向
S A-02	6 間	13.4m	N-23°-W	南北方向
S A-03	5 間	10.3m	N-23°-W	南北方向
S A-04	3間×1間	4.9m×1.7m	N-17.5°-W	南北方向
S A-05	2 間	4.0m	N-22°-W	南北方向

J地区遺構一覧表 挖立柱建物跡

遺構名	桁行×梁間	桁行(m)	梁間(m)	面積(m ²)	主軸方位	建物方向	備 考
S B-01	3×2	5.7	3.7	21.09	N-17.5°-W	南北方向	S B-04と併行時期
S B-02	3×3	6.0	5.7	34.20	N-20.5°-W	南北方向	S D-02と併行時期
S B-03	4×3	7.7	5.5	42.35	N-20.5°-W	南北方向	S D-02に先行する
S B-04	3×2	5.7	4.0	22.80	N-72.5°-E	東西方向	S B-03より後出する
S B-05	5×2	9.9	4.2	41.58	N-18.5°-W	南北方向	S D-08と併行時期
S B-06	3×3	5.8	4.2	24.36	N-21°-W	南北方向	S D-08に先行する
S B-07	3×3	7.1	4.1	29.11	N-21°-W	南北方向	S D-10と併行時期
S B-08	3×2	6.5	(4.3)	27.95	N-23°-W	南北方向	S B-07と併行時期?
S B-09	3×3	6.4	(4.4)	28.16	N-22.5°-W	南北方向	S B-11に先行する
S B-10	3×3	5.8	(5.0)	29.00	N-18.5°-W	南北方向	S B-07に先行し、S D-11と併行時期
S B-11	3×2	5.9	4.0	23.60	N-24°-W	南北方向	S D-09、S B-10より後出する

山ノ上通山遺跡、K地区の調査

調査の結果、掘立柱建物跡4棟、竪穴住居跡1棟、柵列4基、溝状遺構2基、古墳周溝2基、窓状遺構2基、土坑および多数の柱穴状ピットを検出した。調査区は、東に向ってやや傾斜面をなすが、中央部と東側において後世による地山の削平を受けている。このため削平された部分で遺構が欠失しており、その規模・性格など明確にし得なかった。

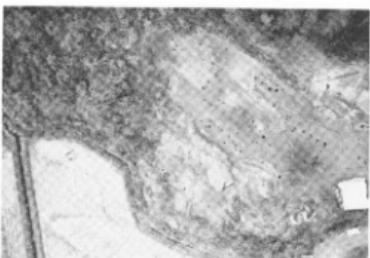
K地区で検出された遺構は、自然地形の傾斜に沿って作られていた。建物の主軸方位は、やや東に振ったN-33°~50°-Eに収まる。調査区の東側には後世の削平により墳丘のほとんどを失った古墳2基が確認された。古墳は、いずれも周溝の1/4周を検出したのみである。また、西側では丘陵斜面変換点において所謂「炭窯」と呼称される窓状遺構2基と、これに付属する作業面を検出した。K地区内における土坑内および柱穴状ピットなどから出土した遺物をみると、古墳時代前期から奈良時代の様相を示す土師器、須恵器がみられた。古墳時代前期の遺構としてSA-02、SB-03、SK-04、SK-05、SD-01がみられ、調査区西側の山裾に集中している。調査区の東側において検出したSD-03は古墳周溝とみられ、



山ノ上通山遺跡群、K地区遺構配置図



K地区、調査前遠景（東より）



K地区、調査後全景（空中写真）



K地区、SB-01検出状態（北より）



K地区、SI-01検出状態（東より）



K地区、古墳周溝検出状態（空中写真）



K地区、SD-03検出状態（西より）



K地区、SD-03遺物出土状態（西より）



K地区、SD-04検出状態（西より）

周溝埋土中より須恵器短頸壺・椀・甕などの出土をみた。SD-04も古墳の周溝と思われ、埋土中より土師器高杯・小形壺・甕などが出土している。SD-03より出土した須恵器は、その特徴からみて陶邑編年第II型式第3段階併行時期が考えられ、おおむね6世紀中葉頃の築造と思われる。またSD-04より出土した土師器は、赤彩を施した高杯の特徴からみて、おおむね5世紀末葉の時期を考えておきたい。SD-03よりやや下る時期のものとしてSI-01がみられる。SI-01の埋土中より多数の土師器、須恵器が出土しているが、中でも須恵器杯身は杯・蓋が逆転する移行期のものと思われ陶邑編年第II型式第6段階に相当する。調査区北側に位置するSB-01は、2棟の重複がみられる。建物南側の梁間部分は後世の削平により柱穴を失っていた。柱穴埋土より出土した遺物は少く時期を確定し難いが、陶邑編年第IV型式第1段階に相当する蓋がみられる。

次に、調査区西側の丘陵斜面裾部より検出された窯状遺構について概述してみよう。

K地区西側の丘陵斜面は畠地として開墾利用されており、かなり旧状を留めていなかった。調査では、斜面裾部において炭片・焼土塊を含んだ黒褐色土を堆積させた窯地状の作業面を検出した。このため斜面側を拡張したところ、2基の窯状遺構を検出するに到了。遺構は窯と側庭とも呼ぶべき作業場がまとった状態で検出された。便宜上、最初に検出



K地区、1・2号窯状遺構検出状態



K地区、1·2号窖状构造平面图

した東側の窯を1号窯状遺構、西側の斜面に位置する窯を2号窯状遺構と呼称する。また、J地区において検出した窯を3号窯状遺構とした。

1号窯状遺構

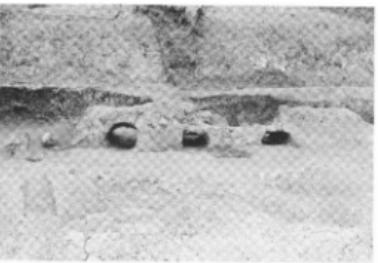
SB-01の西約6mに位置する。丘陵斜面の裾部にあり、等高線に平行した状態で築かれている。窯体は地山を削ぎた地下式で、調査時には天井部の約半分は崩落していた。窯体は長さ9.7m、幅0.55~1.0mで焚口から煙道側に向って蛇行する。窯の床面傾斜角は3度で、ほぼ水平な床面をもつ。横口は9穴を数える。煙道は床面傾斜角よりやや角度をもち5度を測る。床面の横断面傾斜は、焚口および燃焼部では0.5度~4.5度を測るのに比べ、焼成部では6.5度~17度と強い傾斜をついている。この傾向は煙道部へも続き約10度を測る。このため焚口・燃焼部での側壁は0.5~0.6mの高さで残るが、天井部の遺存する焼成部では約0.15~0.2mを測るのみである。横口側面に広がる作業場は長さ約11m、幅約2.2mである。作業場は平坦面とならず、深さ0.2~0.5mほどの窪地状となっており、最奥部よりややゆるい傾斜をとる。作業場の東端部には、粉炭の排出溝と思われる溝が設けられている。排出溝は作業場の2ヶ所で東側へ突出している。焚口前面は、屈曲して作業場へ向け細長い排出溝が設けられている。焚口の底部は、炭片・焼土が堆積し、その上部には地山を混じた褐色土の盛土がみられた。また、煙道より約6.4mの位置で横口上部の地山が抉られた部分が認められ、一段低く整形されていた。このため、ある時期に窯体の規模の縮小が行われた



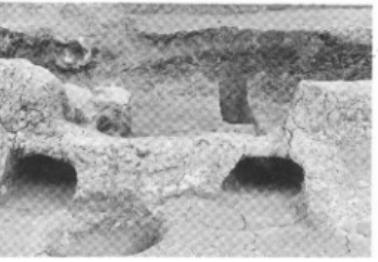
K地区、1号窯状遺構全景（北より）



K地区、1号窯状遺構検出状態（東より）



K地区、1号窯状遺構検出状態（東より）



K地区、1号窯状遺構検出状態（横口拡大）



K地区、2号窯状遺構全景（南より）



K地区、2号窯状遺構全景（北より）

ものと考えられる。1号窯状遺構の熱残留磁気年代は720年±30年の測定結果が得られた。

2号窯状遺構

1号窯の上位に位置する。等高線に斜行した状態で築かれている。窯体の下半部は地山を掘り込んだ半地下式で、窯体内に天井の一部が崩落していたがスサなどの混入のない粘性土でドーム状に築いたものである。窯体は焚口部分を後世の削平により失っているが、長さ9.55m、幅は約0.45mである。天井部は崩落欠失しているが、山側の壁面は0.3～0.4mの高さで残る。窯の床面傾斜は14度である。横口は12穴を数える。横口の遺存度は良好とはいえないが一部で削貫きで作られた状態で残っていた。横口側面の作業場は後世の削平を受けているため一部のみの遺存で、長さ7.5m、最大幅約2.0mを測る。作業場は平坦面とならず、焚口部にかけて傾斜面をなす。煙道部の横口と作業場は、1号窯と同様に一体をなし段差をつけて作業面へ連続する。作業場の北側にピットが穿たれ、須恵器横瓶が出土した。横瓶の特徴からみて陶邑編年第IV型式第1段階（8世紀第2四半期）に相当する。



K地区、2号窯状遺構遺物出土状態（南より）



J地区、3号窯状遺構全景

K地区遺構一覧表、柵列

遺構名	規 模	全 長	主軸方位	方向
S A -01	3 間	6.2m	N-29°-E	南北方向
S A -02	2 間	4.0m	N-44.5°-E	南北方向
S A -03	5 間	7.2m	N-36°-E	南北方向
S A -04	2 間	4.0m	N-29.5°-E	南北方向

K地区遺構一覧表、掘立柱建物跡

遺構名	桁行×梁間	桁行[m]	梁間[m]	面積(m ²)	主軸方位	建物方向	備 考
S B -01	4 × 3	7.3	5.4	39.42	N-33°-E	南北方向	2棟重複
S B -02	1 × 1	2.2	1.6	3.52	N-39°-E	南北方向	
S B -03	(3 × 2)	(6.6)	(4.0)	(26.4)	N-44°-E	南北方向	東側欠失
S B -04	2 × 2	4.2	3.7	15.54	N-50°-W	東西方向	西側欠失



遺構検出作業



遺構振り下げ作業



熱残留磁気測定資料採取状況



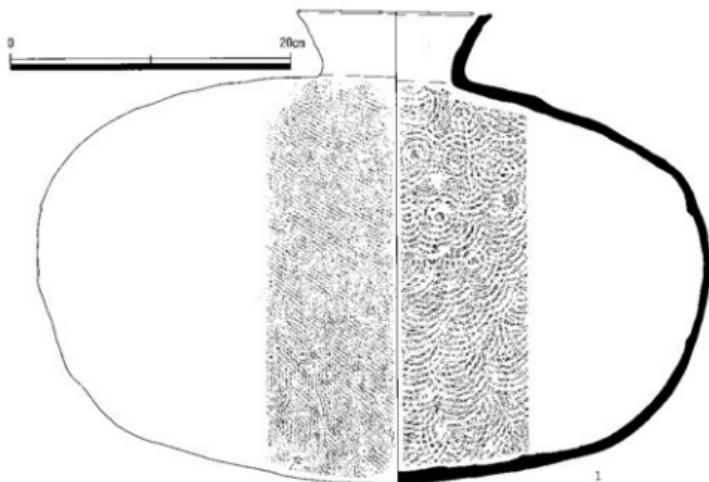
採取作業（右：伊藤晴明氏、左：時枝克安氏）

出土遺物

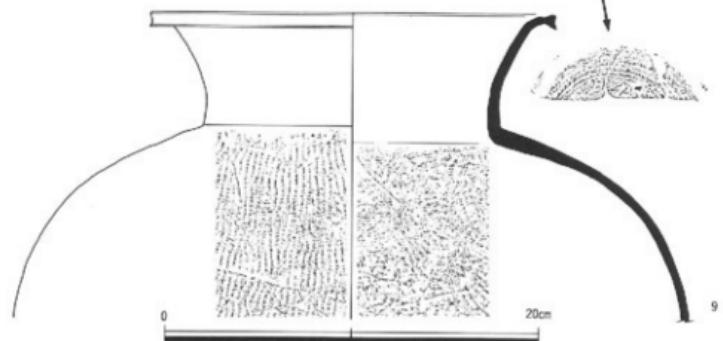
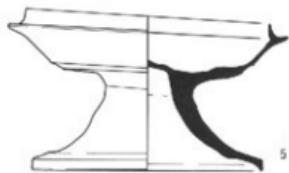
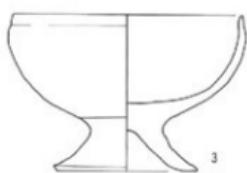
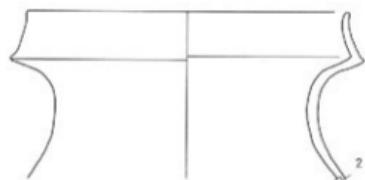
今回の調査で出土した遺物には、古墳時代中期前半～古墳時代終末期、奈良時代の土器が多くみられた。また、砥石・滑石製紡錘車形石製品・石斧などの石製品をはじめ、黒曜石の剝片、鉄斧・不明鉄製品などが出土した。

J地区では、SD-09に先行するSK-01および焼土坑において6世紀後半の須恵器杯身(4)や有蓋高杯(5)の出土をみた。SD-04～06・08を被覆した盛土中より8世紀前半の須恵器広口壺の出土をみており、J地区での遺構の変遷を考えるうえで貴重な資料が得られた。

K地区においては、5世紀前半の土師器壺(2)がSK-04で出土した。壺は、大きく外反する頸部より口縁部下端に稜をもち、極端に内傾する口縁部をもつ。窯状遺構に先行するピット群でも、SK-04前段階の鼓形器台がみられた。また、古墳周溝と考えられるSD-03でも6世紀中葉の須恵器小形有蓋壺(6)が、SD-04では5世紀末の赤彩を施した土師器高杯(3)の出土をみた。SI-01では須恵器杯身(7)がみられ、杯・蓋の逆転する時期の前段階に相当すると思われる。2号窯状遺構では作業場より8世紀第2四半期の須恵器横瓶(1)が出土している。この2号窯状遺構より後出する段階で、1号窯状遺構の作業場に連続する平坦面より須恵器甕(9)、底部に回転糸切り痕を残す高台付杯(8)を出土した。この須恵器の一群は、SB-01と併行関係にあると思われる。



山ノ上通山遺跡、2号窯状遺構作業場出土遺物実測図



山ノ上通山遺跡群、出土遺物実測図



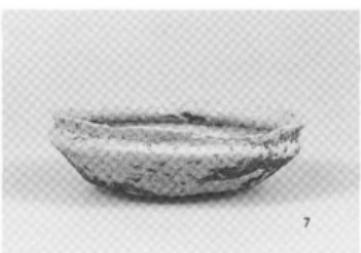
2



3



6



7

ま　と　め

今回、調査を行った山ノ上通山遺跡は、私都川下流域の最も奥まった位置の北部丘陵に立地している。私都川を隔てた南部の丘陵には、多数の古墳や須恵器を生産した窯跡が密集し、丘陵から平地へつづく段丘上に集落の存在を窺わせる散布地が確認されていた。私都川下流域は、古墳の密集した丘陵地と、平地には土師百井庵寺や古代の郡衙が置かれていた万代寺遺跡などの存在からみて重要な地域であることが知られていた。これに比べて、本遺跡周辺は、古墳や窯跡の存在などから古代私都川流域を大まかにとらえることしかできなかった。しかし、私都川が形成した沖積平地の北東部丘陵裾部に立地し、遺物散布地の一つでもあった山ノ上通山遺跡は、今回の調査で私都川流域の古代を考える上で大変貴重な遺跡であることが判明し、多くの成果を得ることができた。

調査で検出した遺構としては、竪穴住居1棟、掘立柱建物14棟、柵列9基、土坑7基、柱穴状ピット330、焼土坑1基、窯状遺構3基、古墳周溝2基などを確認した。J地区においては、古墳時代後期末から奈良時代にかけての掘立柱建物が継続して営まれていたことが明らかとなった。またK地区では、古墳時代中期初頭に生活の痕跡がみられ若干の空白時期を経て、J地区と同様な集落が営まれていた。今回、鳥取県内で二例目の窯状遺構を検出したが、その用途・性格等不明な点が多く、調査によって得られた遺構・遺物の整理、検討を行うことによって、さらに興味深い調査結果を提供してくれるものと思われる。

郡家町文化財報告書16

山ノ上通山遺跡群

発 行 1993・3

発行者 郡家町教育委員会

〒680-04

鳥取県八頭郡郡家町郡家493番地

TEL (0858) 72-0201 (代表)

印 刷 中央印刷株式会社